

# 文章の意味論

林 四 郎

## 1. 文章の意味論のすがた

いちばんふつうに考えられる意味論は、語の意味論である。音声の組み合わせでできる単語それぞれの意味を考えることは、語の意味論に属するから、例えば、辞書を作ることは、意味論的活動の一つの成果である。単語は有限の存在であるから、単語の意味を記述することは有限の作業であり、従って、それを体系化することができる。

文は、その都度生産される無限の存在であるから、個々の文の個別の意味を研究することは、意味論にはならない。文の意味論は、個々の文の意味を考えたり記述したりすることではなくて、文の有限な類型の意味を考えることであろう。例えばある文が疑問の文であるとか、命令の文であるとかいうことを考え、何によって疑問や命令の表現態度が作り出されるのかを考えることは、文の意味論に属する。また、条件句と帰結句との関係には、どのような類型がたどれるかを述記することも、文の意味論の大事な領域である。

文章に意味論があるだろうか。無いと言ってすませれば、それでもいいが、文章論というものを考えていると、どうも、文法論よりも意味論にかかわることの方が多く考えられて来る。それで文章の意味論を設定してみたいと思う。

文章も、文と同じく、無限に生産されるから、個々の文章の意味をたどることは、意味論にはならない。国語教育の場で絶えず行なわれる文章の読解は、理解・鑑賞の活動であって、意味論研究の活動とは別である。

文章の意味は総合的なものであるが、そういう総合の意味ができあがるまでに、語や語句や文の形で、意味の要素が提供される。要素的な意味が総合的な意味に結晶するまでにたどる過程を考えると、そこに、何か典型的なものがたどられるであろう。これを文章意味論の一つのすがたと考える。

文章の意味論は、今後、多くの面で、さまざまに考えられることと思う。ここでは、その一つの面だけをとりあげて考えてみることにする。

単語が、文になり文になりして、次々に文章場面に登場する。すると、それを受け入れる私たちの頭では、個々の単語の意味が、ただ次々に並ぶのではなくて、意味領域の新設や、既成意味領域への繰り入れやらによる意味の体制変えが行なわれて、頭の中には、いつも、新局面における総合的意味ができて行く。

総合的意味が有機的に組み立てられて行くためには、そうさせる処理プログラムが頭にそなわっていないてはならない。それは、どんなプログラムと考えられるか。恐らく、極めて多元的で複雑な命令の組み合わせであろうが、今は、その中から一つの筋だけを取り上げて、単純な仮説を作ってみよう。

## 2. 文章情報の入力に伴う、頭の中の情報処理

表現活動の行なわれる場面の性格に、とりあえず、次の四種を区別することとする。

実在界  
想念界  
情報界  
判断界

実在界とは、表現者の眼前に、事実として存在する世界である。この実在界での表現活動が、すべての表現活動の基本になる。

想念界は、表現者が自由に頭の中に描き出す世界である。実在界とは違って、想念界では 万事、動きが自由で必ずしも時間・空間の論理に従わず、気ままな表現活動の羽を伸ばすことができる。

情報界は、表現者から離れたところに、普遍的な知識・情報として成立する世界である。

判断界は、表現者が心に何かを取り立てて判断の対象に据えるときに設定される世界である。判断界は、必ずしも、広い領域を、独立した一世界として領占するわけではなく、実在界、想念界、情報界での活動の中に、随時、必要に応じて、部分的に設定されうるものである。

判断の種類には、

同定判断  
価値判断  
確かさの判断

などがある。同定判断は、AとBとが、ある点において一致することを、表現者が認めたとき、「AはBである」といって表わすもので、三尾砂氏が判断文と名づけた種類の文が、このときの主役になる。

価値判断における価値とは、結局、プラス価値・マイナス価値に帰するものであるが、その中に、

良不良……よいか、わるいか。

可不可……「……てよい」か、「……てはいけない」か。

好悪……好ましいか、好ましくないか。

美醜……引きつけられるか、引きつけられないか。

などが区別できる。

確かさの判断とは、判断の下しかたの強さをいうもので、はっきり断定するか、なにがしか疑念をいだきつつ言うかの区別を生ずる。疑念によって判断が不確かになる度合いは、さまざまである。

以上四界のうち、基礎になるのは、実在界で、どんな表現活動も、実在界での表現が出発点になる。そこで、以下の論考は、実在界での表現活動についての考察から始めることとし、ほとんど、そこに終始するであろう。

まず、仮説を立てる。

実在界の表現がなされるとき、その表現を受容する人の頭の中にできる理解の体制化は、入力情報の仕分けから始まる。仕分けの分類項目は、

トキの情報

トコロの情報

アリテの情報

アリサマ・アリカタの情報

シテの情報

シサマ・シカタの情報

のように立っていると考える。

アリテは、概して人間以外のもので、私たちの頭では、一般に「ナニが」として受けとめられる。

〔ナニ〕が〔ドノヨウニ〕在る。

〔ナニ〕が〔ドノヨウニ〕〔ナニ〕に成る。

のように情報が入るのがふつうで、「ドノヨウニ」とか「ナニが」とかいう類の情報を、アリサマ・アリカタの情報とする。「アリサマ」と「アリカタ」を分けようとするときは、アリカタが述語概念で、アリサマが連用修飾の概念と

考える。

シテは、主に人間で、「ダレが」と受けとられる。それには、シサマ・シカタの情報が、

〔ダレ〕が〔ナニ〕をする。

〔ダレ〕が〔ドノヨウニ〕〔ナニ〕をする。

のように続くのがふつうである。

アリテにとっては、在り場所が何より大事な条件であるから、トコロの情報は、アリテの情報よりもさきに入ってくることが多い。それで、

〔ドコ〕に〔ナニ〕が〔ドノヨウニ〕在る。

という順に情報が並ぶのが標準的となる。

シテにとっては、トコロよりもトキの方が基本的条件となるので、

〔イツ〕〔ダレ〕が〔ナニ〕をする。

〔イツ〕〔ドコ〕で〔ダレ〕が〔ナニ〕をする。

という順序が標準的となるであろう。

トキ以下のことばを、無理に文法的な用語にして言えば、

トキ	時の状況語	} 状況語
トコロ	所の状況語	

アリテ 主語

アリサマ 修用語

アリカタ 述語

シテ 主語

シサマ 修用語

シカタ 述語

のようになろうが、ここで、文法の論議をする用意はない。

ここでの提言は、実在界場面に入力される情報は、予め頭の中に用意されているトキ・トコロ以下の席に、仕分けされて、着くのだという考えに収約される。

各情報がそのように仕分けされて各自の席につくとき、先行情報と後続情報との間に、どういう関係が生ずるであろうか。実例によって考えてみたい。

### 3. 情報処理機構モデルの追跡

寺田寅彦の随筆文章『囊虫と蜘蛛』を例にし、これを読んで理解する頭を、

情報処理機構の一つのモデルとして設定し、処理のメカニズムを追ってみよう。まず、原文を示す。研究テキストとする関係上、文章に、形式段落による段落番号（㊦㊧…と示す）と、段落内での文番号（①②…と示す）とを付け、文ごとに改行して示す。テキストは、岩波文庫の本文による。

## 糞虫と蜘蛛

寺田寅彦

- ㊦①二階の縁側のガラス戸のすぐ前に大きな<sup>かきで</sup>楓が空いっぱい枝を広がっている。
- ②その枝にたくさん<sup>みつし</sup>な糞虫がぶら下がっている。
- ㊦①去年の夏<sup>じゅう</sup>じゅうはこの虫が盛んに活動していた。
- ②いつも午ごろになるとはい出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食っていた。
- ③からだのわりに<sup>おご</sup>旺盛な彼らの食欲は、多数の小枝を坊主にしてしまうまでは満足されなかった。
- ④紅葉が美しくなるころには、もう活動はしなかったようである。
- ⑤とにかく私は日々が変わって行く葉の色彩に注意を奪われて、しばらく糞虫の存在などは忘れていた。
- ㊦①しかし紅葉が干からび縮れてやがて散ってしまうと、裸になったこずえにぶら下がっている多数の糞虫が急に目立って来た。
- ②大きいや小さいや、長い小枝を杖のように下げたのや、枯れ葉を一枚肩にはおったのや、いろいろさまざまの格好をしたのが、明るい空に対して黒く浮き出して見えた。
- ③それがその日その日の風に吹かれてゆらいでいた。
- ㊦①かよわい糸でつるさされているように見えるが、いかなる木枯らしにも決して吹き落とされないほど、しっかり取りついているのであった。
- ②縁側から<sup>はし</sup>箒の先などではね落とそうとしたが、そんな事ではなかなか落ちそうもなかった。
- ㊦①自分は冬じゅうこの死んでいるか生きているかも分からない虫の<sup>がいまく</sup>外殻の鈴成りになっているのをながめて暮らして来た。
- ②そして自分自身の生活がなんだかこの虫によく似ているような気のする

時もあった。

⑥①春がやって来た。

②今まで灰色や土色をしていたあらゆる落葉樹のこずえにはいつとなしにぼうっと赤みがさして来た。

③鼻のさきの例の楓の小枝の先端も一つ一つふくらみを帯びて来て、それがちょうどガーネットのような光沢をして輝き始めた。

④私はそれがやがて若葉になる時の事を考えているうちに、それまでにこの囊虫を駆除しておく必要を感じて来た。

⑦①たぶんだめだろうとは思ったが、試みに物干し竿<sup>モノヅシ</sup>の長いのを持って来て、たたき落とし、はね落とそうとした。

②しかしやっぱり無効であった。

③はねるたびにあの紡錘形の袋はプロペラーのように空中に輪を回して回転するだけであった。

④悪くすると小枝を折り若芽を傷つけるばかりである。

⑤今度は小さな鋏<sup>ハサミ</sup>を出して来て竿の先に縛りつけた。

⑥それは数年前に流行した十幾とおりの使い方のあるという西洋鋏である。

⑦自分は今その十幾種のほかのもう一つの使い方をしようというのであった。

⑧鋏の発明者も、よもやこれが囊虫を取るために生われようとは思わなかったろう。

⑨鋏の先を半ば開いた形で、竿の先に縛りつけた。

⑩円滑な竹の肌と、ニッケルめっきの鋏の柄とを縛り合わせるのはあまり容易ではなかった。

⑧①ぶらぶらする竿の先を、ねらいを定めて虫のほうへ持って行った。

②そして開いた鋏の刃の間に虫の袋の口に近い所を食い込ませておいてそっと下から突き上げると案外にうまくちぎれるのであった。

③それでもかなり強い抵抗のために細長い竿は弓状に曲がる事もあった。

④幸いに枝を傷つけないで袋だけをむしり取る事ができたのである。

⑨①あるものは枝を離れると同時に鋏を離れて落ちて来た。

②しかしまたあるものは鋏の間に固く食い込んでしまった。

③始めからおもしろがって見ていた子供らは、落ちて来るのを拾い、鋏に

はさまったのをはずしたりした。

④二人の子が順番でかわるがわる取るのであったが、年上のほうは虫に手をつけるのをいやがって小さなショベルですくってはジャムの空罐<sup>あきかん</sup>へほうり込んでいた。

⑥小さい妹のほうはかえって平気で指でつまんで筆入れの箱の上に並べていた。

Ⅹ①庭の楓のはあらかた取り尽くして、他の木のもあさって歩いた。

②結局数えてみたら、大小取り交せて四十九個あった。

③ジャムの空罐一つと筆入れはちようどいっぱいになった。

④それを一ぺん庭<sup>しばよ</sup>の芝生の上にぶちまけて並べてみた。

Ⅺ①一つ一つの虫の外殻<sup>がいかく</sup>にはやはりそれぞれの個性があった。

②わりに大きく長い枯れ枝の片を並べたのが大多数であるが、中にはほとんど目立つほどの枝切れはつけないで、渋紙のようを肌をしているのもあった。

③えにし<sup>えにし</sup>の豆のさやをうまくつなぎ合わせているのもあって、これがのそのそはって歩いていた時の滑稽<sup>こっけい</sup>な様子がおのずから想像された。

Ⅻ①なかんずく大きなのを選んで袋を切り開き、虫がどうなっているかを見たいと思った。

②竿の先の鋏<sup>きりばし</sup>をはずして袋の両端から少しずつ虫を傷つけないように注意しながら切って行った。

③袋の繊維はなかなか強靱<sup>きやうじん</sup>であるので鈍い鋏<sup>きりばし</sup>の刃はしばしば切り損じて上すべりをした。

④やっと取り出した虫はかなり大きなものであった。

⑤紫黒色の肌ははち切れそうに肥<sup>よと</sup>って、大きな貧欲<sup>どんよく</sup>そうな口ばしは褐<sup>かつ</sup>色に光っていた。

⑥袋の暗やみから急に強烈な春の日光に照らされて虫のからだにどんな変化が起こっているか、それは人間には想像もつかないが、なんだか酔ってでもいるように、あるいはまだ長い眼りがさめきらないようにものうげに八対の足を動かしていた。

⑦芝生の上に置いてもとの古巢<sup>ふる</sup>の空きがらを頭の所においてやっても、もはやそれを忘れてしまったのか、はい込むだけの力がないのか、もうそれきりからだを動かさないうでじっとしていた。

Ⅼ①もう一つのを開いて見ると、それはからだの下半が干すば<sup>しやり</sup>って舍利<sup>せり</sup>にな

っていた。

②蚕にあるような病菌がやはりこの虫の世界にも入り込んで自然の制裁を行っているのかと想像された。

③しかし糞虫の恐ろしい敵はまだほかにあった。

14①たくさんの袋を外からつまんでいるうちに、中空で虫のお留守になっているのがかなり多くのパーセントを占めているのに気がついた。

②よく見ていると、そのようなのに限って袋の横腹に直径1ミリかそこらの小さい孔がある事を発見した。

③変だと思って鋏でその一つを切り破って行くうちに、袋の中から思いがけなく小さい蜘蛛が一匹飛び出して来てあわただしくどこかへ逃げ去った。

④ちらりと見ただけであるがそれは薄い紫色をしたかわいらしい小蜘蛛であった。

15①この意外な空巢の占有者を見た時に、私の頭に一つの恐ろしい考えが電光のようにひらめいた。

②それで急いで袋を縦に切り開いて見ると、果たして袋の底に滓のようになった糞虫の遺骸の片々が残っていた。

③あの肥大な虫の汗気という汗気はことごとく吸い尽くされなめ尽くされて、ただ一つまみの灰殻のようなものしか残っていなかった。

④ただあの堅い褐色の口ばしだけはそのままの形をとどめていた。

⑤それはなんだか兜の鉢のような格好にも見られた。

⑥灰色の蟻穴の底に朽ち残った戦衣のくずといったような気もした。

16①この恐ろしい敵は、糞虫の難攻不落と頼む外郭の壁上を忍び足ではい歩くに相違ない。

②そしてわずかな弱点を捜しあてて、そこに鋭い毒芽を働かせ始める。

③壁がやがて破れたと思うと、もう糞虫のわき腹に一滴の毒液が注射されるのであろう。

17①人間ならば来年の夏の青葉の夢でも見ながら、安楽な眠りに包まれている最中に、突然わき腹を食い破る狼の牙を感じるようなものである。

②これを払いのけるためには糞虫の足は全く無能である。

③唯一の武器とする物を使おうとするとあまりに窮屈な自分の家はからだを曲げる事を許さない。

④最後の苦悩にもがくだけの余裕さえもない。



- ⑥生物の間に行われる殺戮ころの中でも、これはおそらく最も残酷なものの一つに相違ない。
- ⑥全く無抵抗な状態において、そして苦痛を表現する事すら許されないで一分だめしに殺されるのである。
- 19①虫の肥大なからだはその十分の一にも足りない小さな蜘蛛の腹の中に消えてしまっている。
- ②残ったものはわずかな外皮のくずと、そして依然として小さい蜘蛛一匹の「生命」である。
- ③差し引きした残りの「物質」はどうなったか分からない。
- 19①養虫が繁殖しようとする所にはおのずからこの蜘蛛が繁殖して、そこに自然の調節が行われているのであった。
- ②私が養虫を駆除しなければ、今に楓の葉は食い尽くされるだろうと思ったのは、あまりにあさはかな人間の自負心であった。
- ③むしろただそのままにもう少し放置して自然の機巧きこうを傍観したほうがよかったように思われて来たのである。
- ④養虫にはどうする事もできないこの蜘蛛にも、また相当の敵があるに相違ない。
- ⑤「昆虫の生活」こんちゅうという書物を読んだ時に、地蜂じへいのあるものが蜘蛛を攻撃して、その毒針を正確に蜘蛛の胸の一局部に刺し通してこれを麻痺まひさせるという記事があった。
- ⑥麻痺した蜘蛛のわき腹に蜂は一つの卵を生みつけて行く。
- ⑦卵から出た幼虫は親の据え膳すゑぜんをしておいてくれた佳肴かきょうをむさぼり食うて生長する、充分飽食して眠っている間に幼虫の単純なからだに複雑な変化が起こって、今度目をさまざまともう一人前の蜂になっているのである。
- 20①ある蜘蛛が、ある蛾かの幼虫であるところの養虫の胸に食いついている一方では、養虫のような形をしたある蜂の幼虫が、他の蜘蛛の腹をしゃぶっている。
- ②このような闘争殺戮さつりくの世界が、美しい花園や庭の木立ちの間に行われているのである。
- ③人間が国際連盟の夢を見ている間に。
- 20①ある学者の説によると、動物界が進化の途中で二派に分かれ、一方は外皮にかたいキチン質を備えた昆虫になり、その最も進歩したものが蜂や

蟻である。

②また他の分派は中心にかたい背骨ができて、そのいちばん発展したのが人間だという事である。

③私にはこの説がどれだけほんとうだか分からない。

④しかしいずれにしても昆虫の世界に行われると同じような闘争の魂があらゆる有脊椎動物を伝わって来て、最後の人間に至ってどことなくあいに進歩して来たかをつくづく考えてみると、つまりわれわれの先祖が囊虫や蜘蛛の先祖と同じであってもいいような気がして来る。

22①四十九個の紡錘体の始末に困ったが、結局花畑のすみの土を深く掘ってその奥に埋めてしまった。

②その中の幾パーセントには、きっと蜘蛛が入っていたに相違ない。

③こうして私の庭での囊虫と蜘蛛の歴史は一段落に達したわけである。

23①しかしこれだけではこの歴史はすみそくに思われぬ。

②私は少なからざる興味と期待をもって今年の夏を待ち受けている。

文章の流れを分析して、次のようにとらえることができる。

① 純実在界の叙述。目の前に見える光景を描写している。

②③④⑤ 記憶の中の実在界の叙述。その中で、トキが過去（去年の夏）にさかのぼり、現在へ向けて流れ下る。囊虫を自分と対比してとらえる所には、想念界もまじる。

⑥ 過去から現在への移行期を実在界でとらえる。過去の終りであると同時に現在の始まりであるから、渡りの段落となっている。大きくとらえれば、①～⑥のまとまりで実在界の叙述をしている。

⑦⑧⑨⑩⑪⑫ トキが現在に定位され、純実在界の叙述が進む。このような叙述を現場叙事という。

⑬⑭⑮ 想念界への体制化が行われる。現場叙事の中にあるが、筆者の思いが加わり始めるからである。大きくとらえれば、⑦～⑮のまとまりで実在界の叙述をしている。

⑯⑰ 蜘蛛の囊虫攻撃を、筆者が想像上に描くので、想念界の叙述である。

⑱ 事実を想像でとらえ解釈を定めたので、判断界の叙述である。

⑲⑳㉑ 知識に昇華させて述べているので、情報界の叙述である。ここでは、もはやトキが消滅している。

㉒ 純実在界叙述へ復帰した。

㊦ 将来への展望を伴うので、想念界を含む実在界叙述である。

以上のようにとらえることができる。

この文章での主要な情報は、第7段落からあとにある。糞虫を打ち落としつつ考えたことから、第19段落以後の3段落にまとまった結論を得たことが特に大事で、これが眼目になっている。第1段落から第6段落までは、問題の発端を述べていて、いわば、導入部をなしている。

現在、私の関心は、この文章全体を分析することにあるのではなく、文章表現の基礎である実在界叙述の中で、情報処理の機構がどう働くかを跡づけることにある。それには、とりあえず、冒頭から第6段落までをたどってみれば、足りるであろう。

追跡を始めよう。

冒頭の文で「二階の縁側のガラス戸のすぐ前に」というとき、ここまでのひとかたまりは、トコロの情報と理解される。次に「大きな楓が」という主語が登場すると、これは、「ドコに」のあとに来る「ナニが」であるから、アリテと理解されるのがふつうであろう。その述語は「空いっぱい枝を広げている」である。分解すれば「空いっぱい」が修用語「ドノヨウニ」で、「枝を広げている」が述語であるが、今はマクロに見て、全体で、アリサマ・アリカタの叙述ととらえよう。

第2文のはじめは「その枝に」とある。前文の述語にあった「枝」を「その枝」と指して、それに「に」がついた時、新しい叙述の中のトコロの叙述となる。続いて「たくさん糞虫が」という主語が登場すると、これはシテでもありうるが、述語が「ぶら下がっている」と静止状態を叙しているところから見て、むしろ、アリテとアリカタの情報が提供されたと見たい。

トコロの席には「二階の縁側のガラス戸のすぐ前」という先行情報がすわっている。そこに、楓の枝を意味する「その枝」という後続情報が入る。この後続情報は、先行情報が描いた絵を消すことなく、それを背景として、新たな絵をかき加える。二つのトコロ情報は、一方が背景に一方が中心になって併存する。アリテの席においても、同様にして、「大きな楓」という先行情報と「たくさん糞虫」という後続情報とが併存する。アリサマ・アリカタの席においても、状況は全く同じで、先行の「空いっぱい枝を広げている」に併存して後続の「ぶら下がっている」が加わるのである。

第2段落の①文は「去年の夏じゅうは」で始まる。この情報が入ったとき、読み手は、先行2文にトキの表示が無かったことに気づく。そして、無いがゆ

えにトキは現在であり、「枝を広げている」「ぶら下がっている」という述語の「いる」が現在性をいっそう保障していたことを知る。してみると、前2文には、現在というトキが潜在していたのである。そこに、「去年の夏」という新しいトキの表示が登場すると、話は、現在のことでなくなり、半年ほど前のことになる。ここにおいて、「現在」と「去年の夏」とは併存関係ではなく、新情報である「去年の夏」が旧情報「現在」の席をうばい、自分がその席に着くこととなる。

この二つの情報は、なにゆえ併存しないのであろうか。それは「去年」が、過去に属するからだ。現在と過去とは、これに「将来」を加えて、三者対等の概念であり、互いに paradigm の関係をなす。このような関係は、日本語を知っている人々の間では、すでに語の意味論のレベルで成立している。この知識が働いて、実在界で時が現在であるとともに過去であるという事態を生じさせないようにするのである。

「去年の夏じゅうはこの虫が盛んに活動していた。」というとき、今度は、蟻虫が、活動するので、シテの席にすわる。シテは、はじめて登場したのであるが、蟻虫は、すでにアリテとして登場しているから、実際は先行者の存続である。移席による存続である。シサマ・シカタの「盛んに活動していた」は、さきのアリカタ「ぶら下がっている」からは面目を一新した。もはや、静止状態にはなくて、活動しているのであるから、情報の交替が行なわれたと見る。

次の第②文は「いつも午ごろになるとはい出して、小枝の先の青葉をたぐり寄せては食っていた。」である。「午ごろ」はトキの情報である。この時、トキの席には、前に潜在していた「現在」から交替した「去年の夏」がすわっているが、この「去年の夏」と、新情報「午ごろ」とは、どういう関係になるだろうか。これは、「去年の夏の午ごろ」と結ばれてよい関係である。「去年の夏」という情報の存在価値は少しも減少せず、そのまま存在しつづけるところに、「ひるごろ」という部分指定の情報が付加され、いっしょになって「去年の夏の午ごろ」というトキの表示ができて上がるのである。

この文には主語が無い。無いことによって、前文のシテ主語「この虫 (= 蟻虫)」が、ここにも潜在して存続する。昼ごろはい出して青葉をたぐり寄せて食うのは、まぎれもなく同じその虫である。この同じシテの新しいシサマ・シカタとして、「はい出す」「青葉をたぐり寄せる」「青葉を食う」という三つのことが述べられる。前文のシカタ叙述は「活動していた」であった。同じ席に着くべき三つの新情報は、先住者「活動」を、どうするであろうか。はい出す

のも、たぐり寄せるのも、食うのも、みな「活動」の一種だから、それらは、「活動」の存在を確認した上で、どんな活動を具体化して描くのである。このように、旧情報の内容を具体化する新情報の働きを、「更新」と呼んでおこう。旧情報の性格をそのまま存置しつつ新しく条件を加えていくありさまは、今さっき「付加」と呼んだものと非常に似ているのであるが、あえて「更新」と名づけて付加と区別するのは、次のような理由がある。

「去年の夏」に「午ごろ」が付加される場合には、その結果「去年の夏の午ごろ」という syntagma を作る事が可能であった。これに対し、「活動」が「はい出す」によって更新される時、「はい出すという活動」という identification は、頭の中でできるが、この形の syntagma ができるとは言いにくい。「たぐり寄せる」にも「食う」にも、同様のことがいえる。もし付加ならば、「活動してはい出す」「活動してたぐり寄せる」「活動して食う」という連語ができて然るべきなのだが、それは考えにくく、「はい出して活動する」「たぐり寄せて活動する」「食って活動する」という順序でなら考えられる。これは、「歩いて行く」「走って行く」「飛んで行く」は言えても、「行って歩く」「行って走る」「行って飛ぶ」と言えない事実から考えればわかるように、「歩く」「走る」「飛ぶ」は「行く」を更新することのできる情報ではあっても、「行く」に付加されるべき情報ではないのである。付加と更新とが同じでないことが、これで明らかになる。

さて、ここまでたどった理解という名の情報処理において、同じ区域の席にすわる先行情報は後続情報との間に、次のような関係が生ずることを見た。

併存 先行情報は存続し、そのわきに後続情報が並ぶ。

付加 先行情報は存続し、その上に後続情報がかぶさって情報をくわしくする。

更新 先行情報は存続するが、後続情報によって、粧いを新たにする。

交替 先行情報は、working area (現役の処理作業場面) から退場し、後続情報が席に着く。

このような4種類である。このうち、併存・付加・更新においては、先行情報が存続するが、交替においては、先行情報が退場する。退場するといっても、理解者の記憶から去ってしまうわけではなく、一度登場した情報は、控えの間において、呼び出しがあれば、いつでも再登場してくる。その控えの間には、恐らく、近い場所にあるものから遠い場所にあるものまで、いろいろな段階のものがあるであろう。長く呼び出しがかからなければ、ついに忘れられ

て、再登場がむずかしくなることもある。

文章場面内に、一つの情報が登場して存続するとき、併存・付加・更新というような、後続情報との関係においてだけ存続するわけではない。併存の相手もなく、付加される情報もなく、更新を経ることもなく、ただそれ自身が存続する情報は、いくらでもある。「糞虫」が「この虫」となり、単に「虫」となり、また「彼ら」と呼ばれたりして、それ自身の存在を続けるのは、この例である。

実在界叙述に見られる情報処理機構の主な原則は、まず、以上のようなものと考えられる。しかし、『糞虫と蜘蛛』の文章における処理の実態を、もうすこし追ってみなければならない。

#### 4. 実在界叙述での理解の流れ

一文一文について、これまでと同様の記述をすることは、あまりにくどい印象を生ずるであろうから、それは避けることとし、冒頭から第6段落までの理解の流れを図式にして一覧できるようにする。次のページに示すものがそれである。文中の語句は、情報の種類によって、トキ・トコロ以下の席に記入し、語句へのかかり受け関係を、右方向へ進む矢印で示した。

この表で、まず、トキの欄を、上から下に向かってたどって見よう。

トキの情報の中では、よく交替が行なわれる。「紅葉が美しくなるころ」(②④)は、日本人の生活体験から「秋」と潜在的に翻訳されるから、先行情報の「夏」と両立せず、これを追い出して、トキの席にすわる。すなわち、時の中で夏から秋への交替が行なわれたのである。次の⑤文で「日々に変って行く葉の色彩」という表現が来ると、これは、やはり秋の紅葉期のことであるから、基本性格は変らぬが、紅葉とは単に静止した赤や黄の色彩ではなく、はげしく変化する流動の美であるという新たな肉付けがなされる。新情報が旧情報「紅葉」を更新するのである。

⑤の①へ来て、「紅葉が干からび縮れてやがて散ってしまう」という表現に接すると、私たちには、もはや、秋から冬へと進展したことがわかる。秋の代表としてトキの席に居居わっていた「紅葉」が、冬の潜在を示す新情報に席を譲りわたす。「冬」ということばはまだ現れないが、潜在する冬へと交替が行なわれたのである。

⑤の①へ来て「冬じゅう」ということばが登場すると、潜在していた冬が、



ここで顕在化する。そして、単に「冬」ではなくて「冬じゅう」であるから、「長い冬の間ずっと」ということで、冬の長期固定化表現がここにある。そうであれば、冬が顕在化するや否や、その冬に、「日々に変る秋とはちがって、同じような調子で長く続く冬の全期間」という意味づけが添ったわけで、冬の情報に、直ちに更新が行なわれたことを知るのである。

④の①「春がやって来た。」という文表現は、それ全体でトキの情報をもたらす。春は冬と両立しないから、新情報「春」が、冬にとって代わる。これは、典型的な交替現象である。

④の④では、「私はそれ（＝小枝の先端のふくらみ）がやがて若葉になる時の事を考え」とある。これは「私」が勝手に心に想像するのだから、想念界の叙述であって、実在界のトキの表現ではない。この時、想像は、去年の夏から秋・冬を経、さらに春を経て夏へ入りかけるところまで行く。「それまでに」と続くから、想像は、夏の手前で止まる。この叙述でトキが夏の寸前まで進んでしまうかという、そうはならない。そこまで行かないのは、時の進展が想念界のことであるため、実在界でのトキは、春でストップしている。

こうして、トキの情報の変化を通覧すると、この席の中では情報の交替が最も起りやすいこと、付加や更新も、ときどき起こることがわかる。交替の現象は、

過去——現在——未来

去年——今年——来年

春——夏——秋——冬

朝——昼——晩

午前——午後

というような paradigm 関係の語の間で起りやすい。

付加は、「去年の夏」「夏のひるごろ」に見るとおり、年の表現から季節の表現へ、季節の表現から時刻の表現へと細分化するような方向への進展において起りやすい。

更新は、表現の具体化の方向で発生するようであるが、これは、トキの情報の中でよりも、他の種類の情報の中で起りやすいようである。この点は、あとの記述で、さらに明らかになるであろう。

次に、トコロの欄を見よう。

「二階の縁側のガラス戸のすぐ前」に、楓の枝である「その枝」が併存することは、すでに見たとおりである。そのあと、④の②文へ行って「小枝の先の



青葉をたぐり寄せては食っていた」という情報が入ると、これは、糞虫というシテのシサマ・シカタを示すものとして働くのであるが、読み手の頭に描かれる絵の中で、「小枝の先」と、そこにある「青葉」とは、糞虫の存在する場所にもなっている。この際、「小枝」は「枝」の更新情報と理解でき、その小枝の「先」というのは「小枝」に付加される情報となる。トキ情報の中で、「去年の夏」に「午ごろ」が付加されたのと同じ関係がここにある。すなわち、「小枝」も「先」もトコロの席を占める情報であるが、それらが排除し合わず、めでたく「小枝の先」という syntagma になるのは、「先」ということばの意味が、常に相対位置を示すからである。

さき——はし——もと——すえ

まえ——うしろ

うち——そと

おもて——うら

うえ——した

みぎ——ひだり

といったようなことばは、元来、相対位置を示すものであるから、それ自身が突然出現することは、原則として、なく、「棒のさき」とか「家の前」とかいうように、先行するトコロ情報に付加されて出現するのが普通なのである。だから、トコロ情報のあとに、これらのことばが来れば、「AのB」という形をしていなくても、AにBが付加される。例えば、

家がある。前に小川が流れている。

という文連続があれば、「家の前」と言われなくても、その「前」は「家の前」になるのである。

このように相対関係を示すことばは、トキ情報にもある。

はじめ——なかごろ——おわり

初期——中期——末期

の類がそれである。

トコロでいえば「木の枝の先」、トキでいえば「今年の夏のはじめ」というようなのが、同じ類型の付加形式である。「枝」が「木」に、「夏」が「今年」に付加されるのは、二つ並んだときの相対関係から、部分概念が全体概念に、付加されることになるのである。これに対し、「先」が「枝」に、「はじめ」が「夏」に付加されるのは、「先」や「はじめ」ということばの元来の相対的意味から、文句なしに付加されることになるのである。

新情報「青葉」が出現し、それがトコロの席に位置しても、先行のトコロ情報（二階の縁側のガラス戸のすぐ前、楓の枝、小枝の先）を排除することはない。「小枝の先の青葉」という syntagma がそれを保障している。これは、枝と葉との相対関係認識がそうさせるのである。

②の④文になると、「紅葉」がトキの情報として登場するが、紅葉もまた、トキの情報であるとともに、トコロの情報でもある。トコロの席について「紅葉」は、先客の「青葉」とは両立しないので、紅葉が青葉から交替して席を確保することになる。読者の頭の中の絵から青葉が消えて、紅葉の世界になる。

⑤文のトキ情報「日々が変わって行く葉の色彩」も、トコロ情報を兼ねる。糞虫の居場所としての紅葉を、一枚の静止した絵から、日ごとに入れ替る何枚もの絵にする。トコロの席にも更新が起っているのである。

③の①文では、日々に変化した結果である「裸になったこずえ」が、トコロの席の安定した主となる。もはや青葉も無く、紅葉も無く、一枚の葉もない枝だけがそこにある。

③の②文では、アリテとしての糞虫がいろいろな形に分化したが、それらは、みな、「明るい空に対して黒く浮き出して」見えるのであるから、それらの共通のアリドコロは「明るい空」である。前文における糞虫のアリドコロは裸のこずえであるが、新しいアリドコロである空は、こずえという情報を追い出しはしない。こずえの背景として空が登場するので、こずえと空とは併存の関係にある。

トコロ情報の中での併存は、A地域の中にB地点が存在するという、包み包まれる関係でのものが多いようである。

③の③および④の①には、トコロについての新しい情報がないので、トコロの席に変化は起らない。それが、④の②にいたり、「縁側から箒の先などではね落とそうとした」という情報が入ると、「縁側」が、新たなトコロ情報として出て来る。

この「縁側」の登場には、二つの特記すべきことがある。一つは、縁側が本当に新登場ではなくて、冒頭文に、「二階の縁側の」として先ず登場したのが、その後言及されなかったために、意識の焦点から遠のいていたのだということ。二つ目は、さきの登場では、ぶら下がる糞虫のアリドコロとしてであったものが、今度は、その糞虫をはね落とそうとするシテ「私」（この文では言及されず、潜在主語になっている）の行動の場面として登場したということである。

第一の事実によって、この縁側の在り方を単純な存続と見ることができる。しかし、第二の事実によって、やや事情がちがって見える。文法的に言えば、片や「糞虫」、片や「私」と、異なるものを主語とする、それぞれの状況語なのであるから、互いに競合する相手ではないわけである。確かに同じ縁側であるのだが、表現者のとらえかたがちがっている。

こういうわけで、この「縁側」は、存続の面ももち、新たな出現の面も持っている。両方を併せ考えれば、これも、更新ととらえることができよう。

第5段落の文章には、トコロ情報が無いので、現状が維持される。⑥の②文になり、「あらゆる落葉樹のこずえには」とある所は、形はいかにもトコロ情報のようであるが、「ぼうっと赤みがさして来た」という叙述により、それは、赤みがさして来ることをアリカタとするアリテの情報と見た方が自然である。次の③文では「鼻のさきの例の楓の小枝の先端も一つ一つふくらみを帯びて来て」となる。ここでは、「小枝の先端」が主語であり、アリテであって、「鼻のさきの楓の」は、そのアリドコロになっている。楓は、冒頭文以来の先客であるが、しばらくそのことばでは登場していない。それで、さかのぼって存続を確かめるために、「ご存知の」という意味で「例の」をつけたのである。

トコロ情報の席の占めかたの中にも、

出現、存続、併存、付加、更新、交替

の6種を区別することができる。

次に、アリテとアリスアマ・アリカタとをいっしょにして、情報の出入状況を見る。

楓と糞虫が併存する。糞虫は、第2段落ではシテに変身するが、第3段落で、再びアリテにもどる。⑦の②文では、その前文で一口に「多数の糞虫」と言われていたものが、

大きいの

小さいの

長い小枝を杖のように下げたの

枯れ葉を一枚肩にはおったの

と、分化して現れ、それが

いろいろさまざまの格好をしたの

と総括される。これらは、みな、「多数の糞虫」の実態なのであるから、これら各態は、「多数の糞虫」という情報の更新されたすがたととらえられる。

その間、糞虫のアリカタは、最初の「ぶら下がっている」が、⑧の①で、ぶ

ら下がっているのが「急に目立って来た」として、その存続が一層確認される。②③文で「明るい空に対して黒く浮き出して見えた」というのは、目立って来たことを更に明確なイメージで描き直したのであるから、情報の更新ととらえられる。

③の③文から④の①②文にかけて、糞虫のぶら下がりがたが極めて頑強であることを述べている。まず、③③文では「風に吹かれてゆらいでいた」とある。これは、「ぶら下がっている」ことの中の一姿態である。「いる」だからといって静止してばかりいるとは限らない。風に吹かれて動いても、それは、やはり「ぶら下がっている」のであるから、「ゆらいでいる」は「ぶら下がっている」の更新された姿である。

「かよいよ糸でつるさされているように見える」のも「しっかり取りついている」のも「なかなか落ちそうもない」のも、みな、同様に「ぶら下がっている」を更新している。さらに④の①文まで行って「死んでいるか生きているかも分からない虫の外殻」が「鈴成りになっている」と描くのも、同じく「ぶら下がっている」を更新しているのである。

④の①文で、トキが春になると、一般落葉樹のこずえ、中でも楓のこずえが存在を主張し始める。④②文の「赤みがさして来た」は新情報の出現を告げる。それが③文で「ふくらみを帯びて」きたのは、赤み情報への付加を示している。さらに「ガーネットのような光沢をして輝き始めた」というのが、さらにこれに付加される情報である。

アリテとアリカタの席を通覧すると、ここには、交替という現象は一回も起っておらず、別なアリテが併存するとともに各アリテのアリカタも併存していることがわかる。

アリテ・アリカタのとらえかたには、しきりに更新が起こる。在るものは変らないが、そのとらえかたに変化が起こるのである。また、アリカタに変化が起こるとき、情報の付加が起こる。この変化がもっと急激で甚だしければ、そこには、情報の交替が発生するであろうが、ここには、それは発生していない。

以上、アリテとアリカタの追跡の中で、ひとつだけ、触れずに過ぎたことがある。それは、②の③文「からだのわりに旺盛な彼らの食欲は、多数の小枝を坊主にしてしまうまでは満足されなかった。」という表現の解釈である。ここでは、糞虫が主語としてとらえられず、「彼らの食欲」が主語に取り立てられて、その食欲がいつ満足されるかを観察する形での現象文記述になっている

が、これをもう一段、深層でとらえれば、「彼らの食欲は、多数の小枝を坊主にしてしまうまで満足されないほど旺盛であった。」という判断文が見出されるだろう。実在界の記述に判断界の記述が割り込んだ形になっている。これは、単純に、見るがままの光景として叙すれば、彼らがものすごい勢いで食うことを言うことになるわけで、それは、シテとシサマ・シカタの情報が受けもつところとなる。それを表現者の一瞬の思考に従って、判断界の記述でとらえたので、「糞虫の食欲」という抽象概念が、例外的にアリテの席に着いたものである。

最後に、シテとシサマ・シカタに関する情報の流れを追ってみる。

最初のシテは糞虫である。アリテとして登場した糞虫がシテに席を移して登場するのが②の①文で、シテとしては初登場だが、糞虫自身としては、存続である。最初のシテとしてのシカタは「盛んに活動していた」のであるが、アリカタ「ぶら下がっている」からの連続で見れば、それからの交替を果したことになる。トキが、潜在していた現在から去年の夏に移って、現在が消えるとともに、静止状態「ぶら下がっている」が消えて、さかんな活動がシカタの席に着いた。②文で、その活動が更新されて、這い出すことと、青葉をたぐり寄せて食うこととに具体化されるさまは、すでに見たとおりである。

第④文で、トキが紅葉の秋に変化すると、糞虫の活動がやんでしまう。シテからアリテへ戻るわけだが、戻りぎわの席は、シカタの方にある。

⑤文になって「私」という新顔のシテが登場するが、これは、尋常のシテではない。これは、糞虫と張り合って何かをする私ではなくて、糞虫の存在や行動を報告してきた、語り手の私である。名乗らなければ、読者はその存在に気づかないはずのものである。糞虫が、ことばでとらえられ描き出された対象存在であるのに対して、私は、とらえることばの使い手であるから、存在のレベルがちがう。メタレベルにいる私であるから、このシテをメタシテと呼ぼう。いろいろなシテがみなメタシテになりうるわけではない。一人称のことばに限って、語り手でありうるから、メタシテは、原則として、一人称のことばで示される人称に限定される。

そのようなメタシテ「私」は、紅葉の美しい間、糞虫の存在を忘れていたという。だから、前文で、そのころの糞虫を「もう活動しなかったようである」と、すこしあいまいなことばでとらえたわけである。

第3第4段落で、糞虫は、冬の到来とともに、動きを失ってアリテにもどる。この間、シテの席は空位である。

第4段落②文で、糞虫をはね落そうときたのは、潜在する私である。この私は、糞虫に対抗して行動する存在であるから、メタシテではなく、糞虫と同じく対象界に席をもつシテである。本当の「私」は、この潜在主語においてはじめて登場したと見るべきである。

⑤の①文で登場する「自分」は、「私」と同じことであり、本当のシテとなった私を受けている。メタシテでない一人称のシテが最初に顕在化したのが、ここである。

一般にシテの席にすわる情報は、先行者を追い出そうとはしないようである。糞虫のあとから登場したメタシテ「私」も、メタならざる対象界のシテ「自分」や「私」も、糞虫と並んでシテの席に座を占める。併存の関係である。

⑥の④文では、存続する私が、楓の若葉になる時のことを考えて、糞虫駆除を思い立つ。シテ「私」のこの行動を表すことばは、いずれも、競合する相手もなく、新情報としてシカタの席につくのである。

わずかひとくだりの文章ではあるが、『糞虫と蜘蛛』の冒頭から6段落までの文章をたどることにより、実在界を描こうとする各種情報が相ついで登場するときに、次のような傾向があることが推知される。

#### a. トキの情報について

- 1) 先行情報と後続情報との間に paradigm の関係があるときは、交替の現象が起り、先行者をらち外に押し出して、後続者がトキの席に着くこととなる。
- 2) 後続情報が、先行情報に対して、意味の階層構造の中で一段階下がる階層に属するものである場合は、後続情報が先行情報に付加されることとなる。  
(例) 去年の夏。夏の朝。
- 3) 「はじめ」「なかごろ」「おわり」に類する意味をもつことばは、トキの先行情報に対しては、常に付加されうる。  
(例) 江戸時代のはじめ。今年のはじめ。夏のはじめ。授業時間のはじめ。

#### b. トコロの情報について

- 1) トコロ情報の中でも、席の占有に交替が起るが、トキ情報の場合に比べれば、それは少なく、トキ情報では起りにくい併存が、トコロ情報では、よく起る。その場合、先行情報が背景の位置に、後続情報が焦点の位置に

つきやすい。

- 2) 前項の現象が、意味の階層構造の所属関係の中で起れば、トキの第2項におけると同じことが、トコロ情報にも発生し、付加の関係を生ずる。

(例) 日本の東京。東京の新宿。

- 3) トキの第3項と同様に、「前」「うしろ」「うちがわ」「そとがわ」等に類する意味のことばがトコロの先行情報に後続すると、常に付加の関係を生じうる。

(例) 家の前。縁側の前。机の前。

### c. アリテとアリカタの情報について

- 1) アリテ情報は、トコロ情報の中に位置づいて登場しやすい。
- 2) 先行情報と後続情報との間に競合は生じにくく、いくつものアリテが容易に併存する。しかし、意識は一つの舞台面であるから、相互の合理的位置づけなしに、いくつものアリテが雑然と併存することはないと考えられる。従って、併存するアリテが数十にも達することはないであろう。
- 3) アリテ情報とアリサマ・アリカタの情報とは、syntactic に結びつけられて登場するのがふつうである。
- 4) 一つのアリテが側面を分化させて存続すると、情報の更新が発生する。
- 5) アリサマ・アリカタの情報においては、一層、更新がよく行なわれる。

### d. シテとシカタの情報について

- 1) シテ情報は、トキ情報の中に位置づいて登場しやすい。
- 2) シテ情報においても、先行者と後続者との間に競合は生じにくく、複数のシテが容易に併存する。ただし、併存しうる数は、アリテの場合より少なく、ふたけたに達することは多くないであろう。(意識舞台の上に十人以上ものシテが並ぶことはなさそうだということ)
- 3) シテは複数ありえても、中心的シテは1人か2人に限定され、特に1人のシテが、ある期間継続して登場するのがふつうである。
- 4) 前項の事情に従って、同一シテのシサマ・シカタを表す情報に、更新が行なわれることも、ふつうである。
- 5) シテが1人称のことばで表されるときに限り、他のシテとはレベルのちがうメタシテになることがある。

実在界叙述における理解の流れは、大体、以上のような情報処理過程で作られているものと思う。

## 5. 情報界叙述での理解の流れ

さて、この文章は、第7段落から完全に現場叙事の筆法で進められ、純粋に実在界の叙述が展開する。ここから先のシテは「自分」で、ときに、二人の子供が加わる。養虫の方は、シテのいろいろなシカタを受けるアリテとなる。

第13段落に、「……と想像された」ということばがあるのがきっかけになり、さらに、15段落で、「私の頭に一つの恐ろしい考えが電光のようにひらめいた」と明記されるに及んで、13・14・15の3段落にわたる叙述は、実在界叙述の中であって想念界叙述への体制化を試みるものとなる。

第16・17の両段落は、筆者が頭に描いている攻撃者と被害者の姿の叙述に費される。目の前に見ているのは養虫の残骸だけであり、ここでの動態は、すべて筆者の想像によって描かれているのであるから、この叙述は、疑いもなく、想念界のものである。その想像に知的判断を下したのが第18段落である。

第19段落から第21段落までの間には、知識の整理がなされている。21段落の末では「われわれの先祖が養虫や蜘蛛の先祖と同じであつてもいいような気がして来る」と言つて、判断界の叙述になるのであるが、それまでは、昆虫の世界と、さらに広く動物の世界において各種生物の間にどういう関係が保たれているかについての叙述を行なっている。これは、筆者がこの場で推論して得た結論ではなくて、かねて得ている知識を組み合わせて、整頓して述べているのであるから、こういうのを情報界の叙述というのである。

このような情報界叙述において、それを理解する私たちの頭は、どのように働くのであろうか。実在界叙述に対処する働きとは、どうも、様子がちがうようである。各情報の席が、トキ・トコロ・アリテ・アリカタ・シテ・シカタに分れるとか、各席の上で交替が行われるとかいうふうなシステムにはなっていないように思われる。

情報界には知識の整理がつきものなのであるから、当然、情報の性格による仕分けは、実在界における以上に整然となされるはずで、その機構を、今後よく考えなければならぬと思つているが、今のところ、それがどんなものか、私には、つかめていない。その考察は、すべて今後待つこととして、今は、気のついた一点だけについて述べることにしたい。

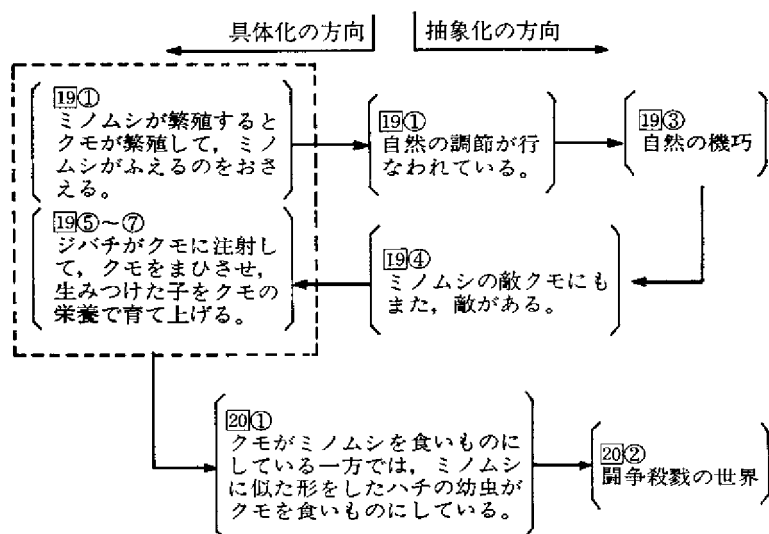


情報界の叙述、少くともこの文章のこのくだりの情報整理のような叙述においては、何より目立つのが、叙述が絶えず抽象のはしごを上り下りすることである。

第19段落の中で、第②文の「私が糞虫を駆除しなければ、今に楓の葉は食い尽くされるだろうと思ったのは、あまりにあさはかな人間の自負心であった。」という叙述だけは筆者の想念内に限定されたことを述べているので、それを除き、残るすべて（6箇の文）と20段落の2箇の文とを合わせた8箇の文について、叙述がどのように具体と抽象の間を往復するかを調べてみると、次のような流れをたどることができる。

図式の左側が具体性の叙述、右側が抽象性の叙述と位置づける。中央の位置は、左側から見れば抽象化した叙述に見え、右側から見れば、具体化した叙述と解釈されるのである。

繁殖をめぐる糞虫と蜘蛛との関係を述べた19①文の前半部は、18段落までの叙述から見れば、大いに抽象化された表現であるが、19段落に入ってから叙述では、これが出発点になる具体的叙述なのである。それを「自然の調節」ということばでとらえたのは、大いなる抽象である。しかし、そのような自然の調節が行なわれていることを、また一段と抽象化して言う「自然の機巧」という一つの名詞句に帰結する。これがこのくだりの叙述の中で抽象の極至にあ



ることばである。

その「自然の機巧」をもっとよく説明するために、書物から得た知識を援用して、蜂が蜘蛛を攻撃する話をもって来る。それへの導入をするのが「この蜘蛛にも相当の敵があるに相違ない」という一文である。それで「自然の機巧」という最抽象表現を一段具体化して、養虫の敵蜘蛛にもまた敵があるという表現にし、それをさらに具体化して、ある種の地蜂と蜘蛛との宿命的な関係を述べるのである。

叙述は、また、そこから抽象化の方向をとり、養虫と蜘蛛との関係、蜘蛛と蜂との関係を総括して、㉑の

ある蜘蛛が、ある蛾の幼虫であるところの養虫の胸に食いついている一方では、養虫のような形をしたある蜂の幼虫が、他の蜘蛛の腹をしゃぶっている。

という叙述を生む。これを、また一挙に抽象化してとらえたのが㉒文の中の「闘争殺戮の世界」という一句である。これは「自然の機巧」とはちがう観点からの抽象化なので、どちらが一層抽象的かということはいえない。抽象度においては同列に並ぶものと見なければならぬ。

このような経路を経て、具体的理解や抽象的理解がなされていくのだが、この間において、抽象的に一語にとらえ得たからと言って、具体レベルでの叙述内容を意識の外へ押し出していいものであろうか。そんなはずはない。具体は抽象によって然るべき位置を得、抽象は具体によって本当に理解される。互いに相手のレベルを必要として理解が果される。抽象化や概括は、思考の経済のために必要なことであり、具体化は真の納得のために必要なことである。

実在界の叙述と情報界の叙述とを端的に性格づけてみると、次のようなことが言えるであろう。

実在界叙述では、主に交替の原理と付加の原理とが使い分けられ、実在界での実在物の変化生滅に準ずる形で、情報の、出現・存続・併存・交替・付加・更新が行なわれる。その結果、眼前の現在のほかは、みな、過去になって退いて行く。

情報界叙述では、情報が累積されて行って、消え去りはしない。しかし、ただ積み重なって一方的にふえて行くのではなく、抽象化の方法によって経済的積蓄を果しつつ進む。具体レベルの情報は、抽象的把握の裏づけ資料として束ねられつつストックされる。

実在界の叙述は、脱皮の原理で進んで行くが、情報界の叙述は、構造化の原理によって一点での把握を可能にしながら進んで行くものと思われる。

（付記） この小考は、昭和59年5月20日、国語学会シンポジウム「文章論の開拓」に参加したときに論じたことをふえんして記したものである。因みに、当日の論者は、永野賢氏、南不二男氏に私で、樺島忠夫氏が司会した。シンポジウムの要旨は、雑誌「国語学」の139集（59年12月武蔵野書院）に記されている。